

今週の為替相場見通し(2023年6月12日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		138.77 ~ 140.45	139.34	137.50 ~ 142.00
ユーロ	(ドル)		1.0668 ~ 1.0787	1.0750	1.0600 ~ 1.0900
(1ユーロ=)	(円)		148.63 ~ 150.43	149.81	148.00 ~ 152.00
英ポンド	(ドル)		1.2370 ~ 1.2590	1.2579	1.2400 ~ 1.2700
(1英ポンド=)	(円)	*	172.67 ~ 175.55	175.31	171.10 ~ 176.80
豪ドル	(ドル)		0.6580 ~ 0.6750	0.6744	0.6650 ~ 0.6850
(1豪ドル=)	(円)	*	92.14 ~ 94.10	93.96	92.50 ~ 95.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 137.50 ~ 142.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

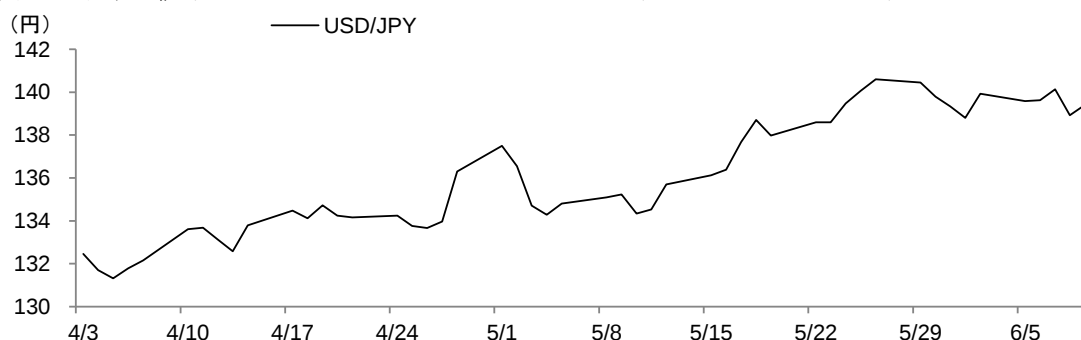
先週のドル/円相場は、軟調な米労働指標を背景に、米金利動向に合わせて下落した。週初5日、140.20円でオープンしたドル/円は、方向感に欠ける中、140円台前半で小動き。海外時間は、米金利上昇に合わせて一時週高値となる140.45円まで上昇も、米5月ISM非製造業景気指数の弱い結果に米金利が低下に転じ、139円台半ばに反落した。6日、ドル/円は139円台半ばでレンジ推移。海外時間は、米金利上昇を受け140円を目指し上昇する展開となった。7日、ドル/円は日本株の軟調推移を背景に139円台前半に下落。海外時間は、139円付近に続落も、カナダ中銀(BOC)が予想に反し+25bpの利上げを実施したことを受け、FRBの利上げ継続期待も高まり米金利は上昇、140円台前半に反転上昇した。8日、ドル/円はリスクオフ相場の中、円が買われ140円を割り込んだ。海外時間は、米新規失業保険申請件数が軟調な結果となり、米金利低下に合わせて138.82円まで下押しした。9日、日本株が反発する中、リスクオンの流れにドル/円も139円台半ばまで上昇。海外時間、カナダ5月雇用統計の冴えない結果に139.02円まで急落する場面もあったが、米金利が持ち直す値を戻し、週末を控えて動意なく推移し139.34円で越週した。

今週のドル/円相場は、底堅い推移を予想する。先週は重要イベントを控えたポジション調整が活発化する中、138.75円~140.50円を中心としたレンジ相場に終始した。今週は、13日(火)発表の米5月消費者物価指数(CPI)及び、14日(水)のFOMCが焦点となる。市場では6月会合では+25bp利上げ期待が一部あるものの据え置きがコンセンサスとなっている他、次回7月会合にて利上げが再開されるとの見方が広がっている。CPIは市場予想ではヘッドライン・コア共に鈍化が見込まれており、予想程度の結果となれば直後のFOMCでは政策金利が据え置かれ、声明文や会見において次回会合以降でのタカ派姿勢を示すものと予想している。また、ドットチャートにおける2023年末の予想中央値が前回5.125%から引き上げられる場合、ドル買い地合いが強まる可能性がある点に注意したい。また、16日(金)には日銀金融政策決定会合も控えているが、市場では現状維持が見込まれている。先週の豪中銀、カナダ中銀がサプライズ利上げを実施したことで各国の利上げ再開が意識される中、円独歩安に繋がりやすい外部環境と言える。140.95円(5/30)を前に介入警戒感が上値を抑制する可能性はあるものの、米債務上限問題も解決し株高も背景にリスクオンムードが高まる中、ドル/円には上昇圧力がかかるだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/5~6/9)の値動き:

安値 138.77 円 高値 140.45 円 終値 139.34 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 山岸 寛昭

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0900 148.00 ~ 152.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は1.07を挟んだレンジ内での推移が続いたあと、週後半に上昇する展開。週初5日、1.0697でオープンしたユーロ/ドルは、軟調な米欧経済指標に振られるも終日方向感を探る展開となり、1.07を挟んだレンジ推移に留まった。6日、ユーロ/ドルは、ECBによる4月消費者インフレ期待調査がインフレ懸念を後退させる内容となり、独金利低下に合わせ一時週安値となる1.0668に下落。7日、ユーロ/ドルは再度週安値付近に下落も、その後は債券/ドルの上昇に連れ高となったほか、好調な株式市場の推移を追い風に一時1.07台半ばまで上昇。引けにかけては、BOCの予想外の利上げを受けたドル買いが重しとなり、1.07付近にほぼ往って来いとなった。8日、ユーロ/ドルは1.07付近での取引が継続していたが、堅調な欧州株式市場や、弱い米経済指標を受けた米金利低下が材料視され、一時週高値となる1.0787まで上昇。9日、ユーロ/ドルは前日に続き1.07台後半での値動きが続いたあと、海外時間に独金利低下を受けて下落し、1.0750で越週。

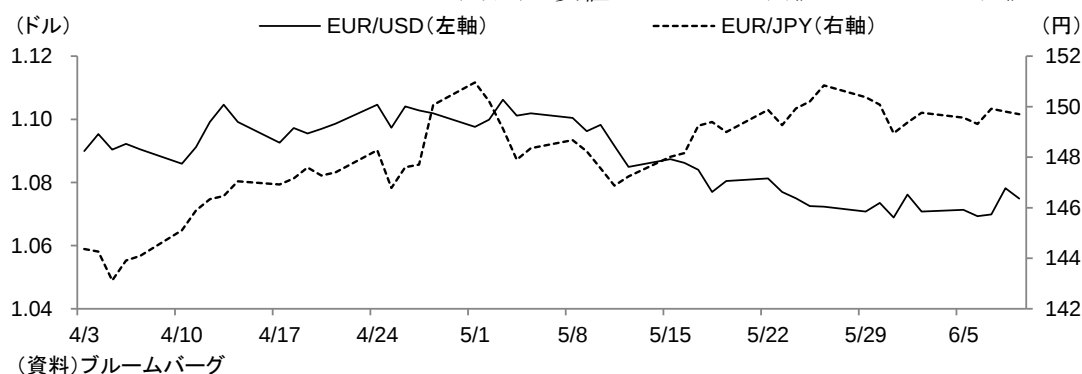
今週のユーロ/ドル相場は、ECBの利上げ継続観測で底堅い展開を予想。利上げを左右するユーロ圏のインフレ動向については、5月コアインフレ率が5.3%と4月の5.6%から低下。ピークアウトした可能性はあるものの、目標の2%は大幅超過。ECBが5月に公表した四半期ごとに行う専門家予測調査(SPF)でも、コアインフレ率23年4.9%、24年2.8%と今後も高止まりを見込んでいる。労働市場の状況を見ると、失業率は4月6.5%と過去最低を更新。タイトな雇用環境による賃金・インフレスパイラルのリスクが、引き続き警戒される状況。先週7日のECB高官発言、クノット・オランダ中銀総裁「現在の引き締めが十分だとはまだ確信していない」、シュナーベル専務理事「基調的なインフレ率がピークに達しても勝利宣言をするには不十分だ」の通り、しばらくECBはタカ派スタンスを維持するとみられる。一方、景気の見通しは不透明感が強く、ユーロ圏GDPは1~3月期まで2四半期連続でマイナス成長。市場の織り込みに沿って今月・来月で+0.25%ずつ利上げを実施すると見込むが、9月以降の金融政策についてはインフレ・景気動向を慎重に見極める展開となりそう。今週は15日(木)のECB政策理事会が注目される。前回に続いて+0.25%利上げが見込まれており、声明文・ラガルド総裁記者会見で、9月以降の利上げ継続にヒントがあるか注目したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/5~6/9)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0668 高値 1.0787 終値 1.0750

(対円) 安値 148.63 高値 150.43 終値 149.81



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2700 171.10 ~ 176.80 円

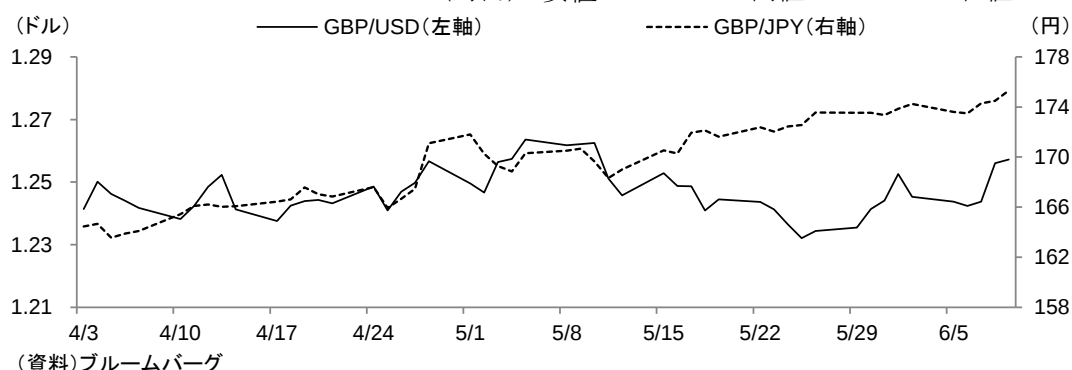
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで約1%上昇。週間で見て対ドルで1%上昇したのは4月28日の週以来となる。ポンドの堅調ぶりは円やユーロといった他の主要通貨でいっそう際立っている。対円では2016年2月以来となる175円を突破し、175円台半ばまで買われる展開となった。対ユーロでも約6か月ぶりの高値水準となった。先週は5日発表の米5月ISMサービス業景況感指数や8日発表の米新規失業保険申請件数が米国における労働需給の逼迫の緩和の可能性を示唆し、ドル安を促す材料となった。もっとも、翌週の6月14日と15日にそれぞれFOMC、ECBの金融政策発表を控えていることを考慮すれば、対ドルで見たポンドの反発は経済指標への反応というよりも、持ち高調整が主体だった可能性がある。一方、ポンドが円やユーロと比較して堅調な展開となっているのは、やはり、イングランド銀行(BOE)の追加利上げ観測がサポート要因となっているだろう。短期金利市場では今年11月までに+100bpの追加利上げが織り込まれている。追加利上げ観測がポンド相場のサポート要因となる中で、気がかりなのは利上げに伴う景気の減速リスクである。先週発表された英国の経済指標では、8日発表の5月RICS住宅価格指数が▲30%と4月分の▲39%からマイナス幅を縮小したものの大幅な落ち込みとなっている。金融引き締めの影響が資産価格の調整に留まるうちはBOEが利上げ停止判断に傾くことは無いものの、資産価格の下落や住宅ローン返済負担の増大が個人消費の減速につながる経路は注視する必要があるだろう。

今週1週間のポンド相場は6月14日(水)と15日(木)にそれぞれFOMC、ECBの金融政策発表を控え、まずはイベント待ちとなろう。市場では6月会合でのFRBの利上げ停止がコンセンサスとなりつつある。次期副議長に最近指名されたジェファースン理事が(5月雇用統計前とはいえ)6月会合での金利据え置きを示唆したことや(5月31日)、米5月雇用統計が雇用者数は力強い伸びだったものの、賃金の伸び鈍化や失業率の上昇など強弱まちまちな内容であったことが(6月2日)、金融引き締め停止観測を後押しする材料となっている。米利上げ停止となれば、中銀が金融引き締めを当面は継続するであろうユーロやポンドにとっては追い風となる公算が大きい。なお、英国では6月9日にジョンソン元首相が下院議員を辞職すると発表しているが、金融市場への影響は限定的であろう。ジョンソン氏はコロナ禍での国民への自粛要請に関わらずパーティーに参加したこと、それにも関わらず議会で「コロナ規制を守ってきた」と発言したことが虚偽として批判を受けているわけだが、基本的には個人の資質の問題であるように思われる。ジョンソン氏の辞任に伴い、同氏に近い議員2名も辞職しており、3度の補選が行われることとなる。5月に行われた統一地方選挙で労働党に大敗を喫したスナク政権にとってはさらなる逆風となろうが、とはいえもともと保守党が世論調査などで労働党の後塵を拝していたことを考慮すれば、政治情勢がこれで大きく動くものでもないだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/5~6/9)の値動き: (対ドル) 安値 1.2370 高値 1.2590 終値 1.2579
(対円) 安値 172.67 高値 175.55 終値 175.31



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 0.6650 ~ 0.6850 92.50 ~ 95.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは上昇。週初5日、0.66ちょうど近辺でオープン後、特段材料ない中、じりじりと下落。米5月ISM非製造業景況指数が予想を下振れると、米ドル売りで反応。豪ドルは0.6637まで上昇後も高値圏を推移。翌6日、RBA会合で+25bp利上げが発表され、且つ声明文でも今後更なる金融政策の引き締めが示唆された事を背景に0.6620から0.6670近辺まで上昇し、2週間ぶりの高値圏0.6686を付けた。NY時間では金融株中心に株が上昇し、豪ドルが支えられ、引けは0.6672となった。週央7日は0.6680でオープン後、アジア時間は狭いレンジで推移。その後、カナダ中銀が市場予想に反して+25bp利上げを発表すると、翌週に控えている6月FOMCでの利上げ期待も高まり米ドル高の展開に。豪ドルは0.6650近辺まで下落した。8日は豪3年債利回りが2012年以来の高水準を記録した事で右肩上がりになり上昇。NY時間に入り、米新規失業保険申請件数が市場予想を上回り急増した事で、労働市場の冷え込みの兆候を示し始めていると捉えられ、今後のFRBの利上げの可能性が後退したことで米2年債金利は4.55%台から4.48%まで下落。ドル売りの流れから豪ドルは0.67台に乗せると、ハイテク株を中心にS&P500が上昇し、年初来高値を更新した事も豪ドルを支え、0.67台を維持。週末9日、特段材料ない中、豪ドルは底堅く推移し週高値0.6750をつけそのまま高値圏で越えた。

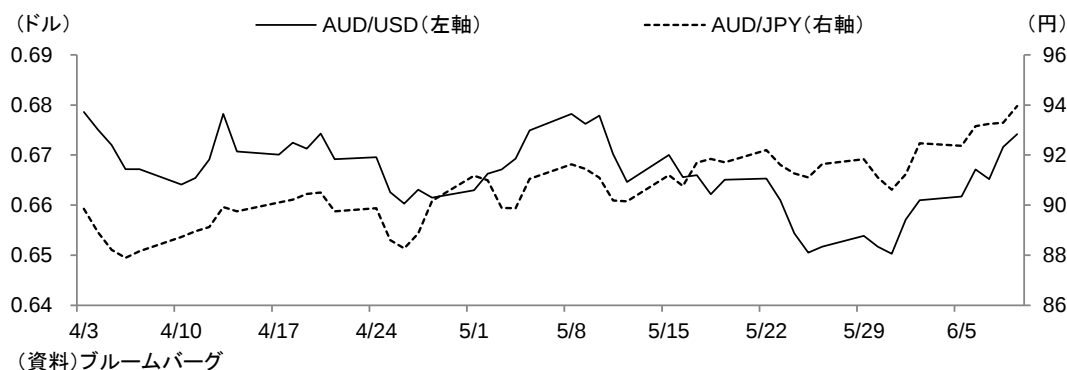
今週の豪ドルは揉み合う展開を予想。先週の6月RBA会合では据え置き予想に反して+25bp利上げを決定。一方で、労働党の選挙公約である最低賃金引き上げも決定され、インフレ抑制に窮する状況という印象。指標面では豪1~3月期GDPが前期比・前年比ともに予想を下回り、1年半ぶりの低い伸びとなっており、さらに1~3月期個人破産は前年比12.6%上昇。インフレが家計を確実に苦しめていることが露わになっており、経済減速懸念が漂う中、豪ドルは次第に上値重い展開を想定。ただ、金利面では米利上げの一時停止が意識され、米ドル売りが入り易い状況は豪ドルのサポート要因であり、結局売り買いが交錯すると考えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/5~6/9)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6580 高値 0.6750 終値 0.6744

(対円) 安値 92.14 高値 94.10 終値 93.96



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。